



2011/12/1 No.58

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会  
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

上総湊に新たな高齢者施設を



特別養護老人ホーム  
開設準備室長  
簾 昭博

上総湊に新たな高齢者施設を。上総湊の海岸から東に五〇〇メートル入ると、かなりの傾斜でせり上がった二〇メートル程の高台があります。平成二三年二月に法人本部の位置する富津にオープンした望みの門ハイムの建設予定候補地として、当初この地が挙げられていたの思い出します。現在は、(仮称)特別養護老人ホーム望みの門富士見荘の建設が予定されていますが、目の前には東京湾が一望でき遙か彼方には富士の姿を見ることが出来ます。まさに富士見の場所として相応しい、癒しのある高齢者施設となることが望まれます。

富士見荘では、現在国が推し進めているユニットケアを取り込み、各々一〇床の個室からなる三つのユニットの設置を予定しています。各ユニットには入居の皆様が食事や団らんの時を過ごせるように共同生活室があり、浴室・トイレなど生活に必要な設備がユニットごとに設置されています。ユニットのお部屋はすべて個室で、各居室には介護用の昇降機能付きベッドや、収納用のローチェスト、

入所者の状況にあわせて場合によってはポータルトイレなどを準備する予定です。ユニットケアと別に、従来型の二名・四名の多床室を三〇床、更にショートステイを対象とした多床室を一〇床設置します。従来型の部分で行われるサービスは、現在紫苑荘で行われているサービスと同じ形態となります。対して、ユニットで行われるサービスは、ユニットケアと称され、従来のサービスとは一線を画すこととなります。

ユニット型特別養護老人ホームは、入居者一人一人の意思及び人格を尊重し、入居者へのサービスを提供に関する計画に基づき、その居宅における生活への復帰を念頭に置いて、入居前の居宅における生活と入居後の生活が連続したものとなるよう配慮しながら、各ユニットにおいて入居者が相互に社会的関係を築き、自律的な日常生活を営むことを支援しなければならぬとされています。ですから、従来型の施設と比較し、より、個々の生活を尊重しプライバシーが確立されたサービス展開がなされなければなりません。これについては、個室完備により個々の生活空間がしっか



りと確保されることとなります。また、生活単位が一〇名と小規模になることで、なじみの関係を築かせて頂くことができ、利用者もいきいきと生活され、職員も利用者お一人お一人と深く関わることが出来るという効果が期待されます。更には、ユニット毎に特色ある取り組みをすることで、生きがいのある生活が送れます。このことが定着すれば、利用者の性格や趣味・希望にあわせてユニットを選択していただくこともでき、特徴あるユニットケアの提供が可能となります。

新たな施設が、地域の方々はもちろんのこと、多くの方々に受け入れられ、高齢者の福祉のために用いられるように、そして、地域住民のコミュニティーの一部としてもご活用いただけるように努めてまいります。

## 退職の感謝と再出発

法人事務局嘱託 菊地 正弘

この度、一月三〇日付にて「望みの門」を退職することになりました。

二〇〇五年四月一日以来、六年八ヶ月の間、法人事務局嘱託職員として中核地域生活支援センター勤務を始め、ISO九〇〇一品質マネジメントシステムの認証取得とその後の維持業務に従事させて頂きました。また、チャプレンの一員として「望みの門教会」の主日礼拝奉仕と、主として紫苑荘利用者の方々を中心にお話相手などもさせて頂きました。私は、物造りの会社を定年退職後、献身者

として社会福祉の仕事に転身しました。従い、私の周囲は「物から人」に変わり、今でもそうですが緊張の毎日でした。しかし、喜びも沢山頂き、楽しく勤めることができました。主イエスの導



きと私に係わって下さった皆さまに心から感謝申し上げます。大きく成長しつつある「望みの門」の働きが、今後益々、神の栄光のために祝され用いられることをお祈り致しております。待降節を迎え、「だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」(マタイ二四：四四)を共に頂き、お礼のことばと致します。今後は、「望みの門」理事・評議員としてご奉仕させて頂きますので、よろしくお願い申しあげます。

在 主

## 日独交流二五〇周年記念植樹

法人事務局長 西尾 建

二〇一一年一月一日午後一時、暖かい秋の日差しに爽やかな風が心地よく流れるなか、本年二月にオープンした有料老人ホーム望みの門ハイムの前庭にて日独交流一五〇周

年を記念して植樹式を挙行いたしました。

日独交流一五〇周年は、一五〇年前の一八六一年ドイツの前身であるプロイセン王国と日本との間で締結された日普修好・通商・航海条約が起点となること。これを記念してドイツ連邦共和国大使館から一五〇本の菩提樹(Lindenbaum)が日本に贈られ、当法人にそのうちの二本が寄贈されたものであります。



当日は、法人内の利用者、役員、ご来賓として千葉県日独協会から宗宮好和会長、樋口昭八副会長をお招きして約六〇名の参加者がありました。式では宗宮会長からドイツとの関わりの歴史や菩提樹にまつわるお話が祝辞としてあり、ドイツとの関わりの深い当法人で育ててもらえるのは菩提樹にとっても幸せなことだと思ふと締め括られました。のぞみ会も法人としての歩みが来年で五〇

年を迎えます。ドイツMBKミッションから派遣された宣教師の活動が富津と東京の地で現在の形となっています。この菩提樹は成長すると一〇〜三〇mの樹高になるそうです。きっと木陰で太陽の陽射しや風雨をしのげるようになることでしょう。

当法人もこの菩提樹と共に更に大きく地域に根を張って、皆が木陰にそっと重荷を降ろし休むことができる、安らぎを与えられる大樹のような存在でありたいと気持ちを新たにすする式となりました。

望みの門福祉学校

ホームヘルパー養成講座

平成十四年から始まったこの養成講座も、今年で十年目を迎えました。

校長 佐野 毅

開講当初の目的は、主に知的ハンディがある方々を対象に、彼ら(彼女ら)の就労支援の一環として「三級ホームヘルパー養成講座」としてスタートしました。そのうちに世の中の流れが、「施設福祉」中心から「在宅介護」を主体とした地域福祉の時代になり、より多くの介護人材の養成が叫ばれるようになりました。



よって望みの門でも、時流に沿って、より高度な技術と知識が要求される「二級ホームヘルパー」の養成講座を開講するに至りました。

おかげさまでこの十年間で、延べ二〇〇名余の修了者を輩出したしました。修了者の中には、講座修了後、望みの門の職員となって紫苑荘やデイサービスセンター、ホームヘルパーステーションで今も活躍している職員もおりますし、地域の中で在宅介護のリーダー的存在として地域貢献されている方々も多数いらっしゃいます。

必要に迫られて今年度からは、年間を通じて養成講座を常時開催することになりました。ここに、今年度第二期の修了者から、講座修了の喜びの声を承りましたのでご紹介いたします。



「九月から始まったこの講習。初めの頃は受講者の中に知り合いもおらず、私自身高校に通いながらこの講座に休まず最後まで受講できるかすごく不安でした。でも、受講者の皆さん本当に良い人たちですぐに打ち解けました。講習を進めていくうちに「介護」という仕事は本当に大変だ、ということが良く分かりました。しかし、その反面、とても大切

な仕事だと思いました。施設実習で、実際に利用者様とお会いしたときには一度に何人もの利用者様に囲まれて、利用者様が一生懸命に私に話しかけてくださったので、とても嬉しかったです。私は、高校卒業後は、介護の道に進もうと思っているのですが、今回望みの門のホームヘルパー講習を受講することが出来て、とても良かったです。」

(高校三年生。S・Nさん)

「九月三日の開講式に始まり、延べ二六日間、一三〇時間の講義、演習、施設実習を経て、本日無事に修了証書をいただくことが出来ました。この間、慈愛溢れる講師陣の方々の教えと御指導を受け、本当に心から感謝しております。私は、お見受けしたところ他の受講者さんの中で一番の高齢であるということと、男性であるということとで些かの遠慮もありましたが、この実りある講習を活かして、今後ともより多くの方々のお役に立つことが出来れば、と思っております。ありがとうございます。」

(T・Wさん)

東京望みの門 マナの家 「夕食を作る」



非常勤調理員 舌間 允子

縁あって、一月から週二日「マナの家」で夕食作りのお手伝いをする事になりました。早いものでやがて一年になろうとしています。未経験な私には不安ばかりの一日一日で、これでよかったのだろうかいつもクエスチョンマークで終わります。

「今晚のおかずはなアに」調理している私の声がかかる。まるで何十年前か前の子育て中の私が戻って来たかの様な錯覚にかられる時です。

仕事を終えて順に帰宅して来る時間になっている。もうこんな時間、さああと一息、毎回のことです。精一杯勤めて、さぞ疲れて帰って来ていることだろう。ホッと安心出来る家に帰って来たのだから、食事も温かいもので包んであげたいと思う。和やかで楽しい食卓である様に、一日の疲れが取れる食卓である様にと願いながら。主婦の域を出ない料理の中で今晚は何を作っておこうか、毎回微力をふりしぼって考えています。

ともすると、形式的としか思えない多様な糧食の形が現れて来ている今の社会。その中で食事をするという意味が、健康に及ぼす影響の源、最も自然な栄養補給、命をつないで行くためのものという重さがあるのだということ。毎日の食事の中で、当たり前のこととして寮生に消化され、これから独立し生活していくであろう時に、自然体として体に沁み込んで欲しいと思わずにはいられません。それでも寮生一人一人には、当然好き嫌いの食べ物があ、把握しながらも押して食卓に並べる勇氣も必要なこと、ごめんねと思いがら。一年経つ内に寮生ともスムーズに会話を持つてくれる様になり、今度あれを作ったら喜んでくれるかしら、それとも等とくだけて考える事が出来る様になって来た

のも月日のお陰と喜んでいきます。

動的に考慮された清潔な台所で今日も夕食を作ります。少しでもスローフードに近づきたいと思いつつながら、又聞かえて来た「今晚のおかずなアに」の言葉に何十年かの若い自分の姿に返って、ああ幸せなことだと思いつつながら、寮生一人一人の幸せを願いつつながら。

**「教会音楽祭を終えて」の**

婦人保護施設 望みの門学園

作業指導員 山口寿美子

九月二三日（金）第四三回教会音楽祭が行われました。今回の音楽祭は千葉県南ブロック一四教会の参加となり、会場は千葉市にある植草学園。演目は勿論四年目になる手話での賛美「望みも消えゆくまでに」「主よ命の言葉を」の二曲です。鈴木洞子先生にご指導して頂き、全員一丸となり無事乗り切ることができました。不思議なもので練習時には「ここが違う！」「なんでこうできないの？」などなど：皆それぞれに必死になり、言い合いつつ当日を迎えるのですが、本番となると落ち着いてピタッと決めるのです。かえって職員の方がハラハラドキドキなんてこともあります。そこの



紫のポロシャツを着て壇上に上がり、前を向き手話をする姿は堂々としておりなかなかのもので。学園の利用者一人ひとりの力が集まり成し得た結果ですが、いつもながらチームワークの良さに頭の下がる思いです。

あれから二カ月、今は合同クリスマスに向けて手話を練習しています。二曲のうち一曲は音楽祭での曲です。本番に強い学園ですので何とか乗り切ることと思いますが課題が一つ：「すてきな笑顔」です。易しそうで案外難しいもの。良き日に向け一日一日を大事に過ごし、手話賛美をすてきな笑顔で出来るよう利用者・職員一つとなりクリスマスを迎えたいと思います。

**「園長が来たら」**

養護老人ホーム 望みの門楽生園

園長 井本 義孝

一〇月に新特養人事のため連動して楽生園園長が異動し、前白鳥園長は方舟乳児園長として転出、井本総合施設長が後任として着任した。一月六日から一日まで新園長は来年度の法人創立五〇周年記念感謝会事業に関連しMBK他関連施設を訪問、交流した。四泊六日の駆け足旅行ではあったが、多大なる収穫があった。以下その顛末記である。

一月六日一〇時過ぎ成田を発ったルフトハンザ機は大過なくフラंकフルト空港に同日午後二時過ぎ到着。ハノーファー行きに乗り換え午後六時頃安着、空港にはG・シェアー師（以下S師と略す）がお出で下さ

り、大感謝。夜霧の町を約一時間ベーターのHOTELリンドンホフに着く。七時半夕食、まず三年振りの邂逅に感謝し、一日目のベーターの夜を迎えた。(日本時間七日朝三時半)

一月七日一時S師迎えに来られる。ホテルの庭には日独の国旗が掲揚台にはためている。三年前の天皇・皇后の訪問を記念した日本庭園が出来ている。発達障害の青年が落ち葉を掃いている。思えば四二年前二階にヘンツェルト師と四〇日間同室で四月から過ごした事であった。―閑話休題―

S師の母上様のいるオーガステイン・ハイムに着きお目にかかる。私と同年輩で親しみが沸く。高級マンションの趣きベランダからの借景が素晴らしい。広い庭、黄葉した木々、入口左に収納室、右トイレシャワー、八畳位の居間、横に寝室、特記すべきは昼食に行かなかつた場合は部屋にコールされ返事なき時は、待機中のナースが二人で部屋に来る。つまり安否確認は二人一組とのことであった。必要の時は携帯のコール機を身につけており、着衣の上から押せるとのこと。散歩中でも介護に来てくださるとのこと。ちなみに自己負担一カ月約二〇万円かかるそうである。図書室、追悼の室に感銘、昇天者ノートがあり静かに祈ることができる。今日は四年前に昇天された父上様の誕生日でもあり十一月一〇日の「追慕の日曜日」も近いのでお墓参りをする事になった。歩いて三〇分位のところであったが車で行く。近くの花屋

で根付きのお花を買う。墓地は広く市が管理しているとのこと。ウーリツヒ・シェアー氏は四年前に七四歳で召天され、好きだったアイヒ(柏の木)の木の横に眠っておられた。墓地面積は約六畳あり、一際広



かった。お祈りをし記念撮影をする。ハイムに戻り二五〇人席の大食堂で一緒に昼食となる。イルーゼ母さんの平安を祈りつつお別れして、午後三時頃MBKに着く。元教会の施設であったが、昨年払い下げを受けた。五四床あり週末が忙しいとのこと。床に座布団の「黙想の室」が印象的であった。ここで幸いなことに休暇中で会えなかったはずの理事長ベーター・ヘバイセン先生にお会いできた。五〇年近く望みの門を支援して下さったことのお礼を申し上げ、五〇周年を迎えてより緊密に交流したいとお伝えし、お土産と献金を差し上げる。これからは望みの門がMBKを援けたい。日本に来たい青少年をどしどし受け入れましょう等、宗教的業務が激減して世俗化が進み、若者の教会離れのことなど話された。偶々本日一人の青年から電話があり、喜んでおられた。

S師はその後施設を案内して下さい、そのままご自宅に招いて下さる。御自宅は閑静

なビーレフェルト郊外の四F建のアパートで最上階にありベランダにリスが来るとのこと。お茶とケーキをよばれる。午後五時ドローテ・ゾントークさん来訪されて、二年前に来日した彼女は今ウツパーターの神学生となり、公的資格を目指している。美しい娘さんになっていった。(続く)

## 行事を通して



主査事務員 大貫 孝夫

一〇月八日のとても晴れ晴れとした日差しの中、日ごろお世話になっている関係機関の方たちをお迎えし、第四二回地域交流スポーツ大会が開催されました。望みの門紫苑荘ではパン食い競争のみの参加ということで、午後から会場へ向かいました。利用者の方を車椅子に載せて連れていくと、あたたかい太陽の光を浴び、気持ちよさそうな顔をしていました。会場へ到着し午後一発目の恒例「望みの門新生舎よさこいソーラン節」、元気な声が響き渡り午後部の部が開始しました。そして、パン食い競争に開始。各施設の参加者が次々と白熱した競争をし、ついに望みの門紫苑荘の順番が回ってき



ました。望みの門紫苑荘では、利用者定員の三分の一に当たる約二〇名の方が参加されました。スタートの位置に到着し、笛の音に合わせて一斉にスタート。パンがぶら下がっているところに着くと我先にパンを取ろうと袋に向かって必死に噛みつきます。パンを口にくわえ(手で素早く取った方もいらっしゃいました)ゴールへ一目散。競技でパンが取れた時の利用者の方々のうれしそうな顔がとても印象的でした。私が望みの門に就職して一〇年が経とうとしております。その間にも、様々な施設の行事、合同行事を見て参りました。毎回、参加して思うのが、利用者の方々の普段見られない笑顔がたくさん出ているなという事です。やはり、普段生活している空間を離れ、何かをするという事がとても心に良く、その気持ちに顔に表れてくるのだと感じました。事業数が多くなり、事業種別も違うのですが、合同行事など大切に行けたらよいと思います。私は事務員なので普段の生活のお手伝いはできませんが、その分イベントなどで利用者の方々の笑顔を引き出せたらなと思っています。

**在宅支援課**

**地域で暮らすデイサービスセンターの日常**

課長 白鳥 尋子

寒暖の差が激しく風が身にしみる季節となりました。デイサービスセンターの皆さんも体調を崩しお休みする方が増えてきております。これからの時期はこたつの中でぬくぬく

と一日を過ごしたいところですが、身体を動かす時間が減ると筋力も一緒に落ちてしまいます。衣服で体温の調整を行い、適度な運動をお勧めします。と言っても一人ではなかなかできない…という方は、是非健康教室に参加してみてください。

在宅支援課の介護予防センターではスポーツの秋ともいえる一〇月、大堀二区集会所に健康教室を開講しました。

二一年五月に大佐和地区・昨年一〇月には富津地区が開講。大堀地区は三つ目の会場となります。

大堀地区にはデイサービスセンターを御利用の皆様や、富津健康教室に参加されている方がいらっしゃいますが、望みの門として地区をお借りするのは初めての試みです。知名度も低い為、富津市役所地域包括センターを中心に地区社協の皆様、老人会の会長さん等のご協力もあり、開講日には一五名の方が集まって下さり、体操終了後には全員の方が登録して下さいました。また、ご近所や、お友達も誘いたいからと申込書を数枚持って帰られた方もおり、皆様の温かさを感じた開講日となりました。

毎月一回・二時間の教室ですが、一人でも多くの方に参加して戴き、介護認定を受けず、元気に在宅での生活を送っていただきたたく、簡単な体操を始め、健康面や、栄養面のお話・ゲーム等を取り入れ楽しく体力づくりを行っています。

ご自分で通える方、介護認定を受けて無い

方であれば、どなたでも参加できます。この寒い時期、大笑いをしながら楽しく体操をして身体を温めて頂きたいです。

在宅支援課は、ケアマネージャーを始め、介護保険の有無に問わず、地域の皆さんがお元気で在宅生活ができるようこれからもお手伝いしていきます。

**有料老人ホーム 望みの門ハイム**

**「ハイムの日常」**

介護員 渡邊 恭伸

望みの門ハイムはこの十二月で竣工から丸一年、入居開始から九ヶ月経ちました。入居者数は十一月末現在で九部屋十名、残り一部屋となり、日に日に賑やかになって来ております。これもひとえに皆様の多大なるご支援によるものと心より感謝いたします。

ご入居された皆様は、それぞれ日々の暮らしを穏やかに、楽しく、充実した毎日を通して頂けている様です。一日の過ごし方も、隣接のデイサービスに通う方や市外のデイケアまで週三回通い熱心にリハビリに取り組まれる方、ホーム内に併設されている訪問介護を利用されている方、散歩が日課になっている方、絵を描く趣味をお持ちの方、御友人との手紙のやり取りを楽しみにされている方など、育ってきた環境も違い、それぞれ



れ培ってきた生活スタイルや趣味も様々ですが、入居者様同士誘い合わせて散歩に出かけたり、時には、散歩中に見つけた綺麗な草花を絵の題材にしたらどうかと摘んできてプレゼントしたり：そんな様子を拝見していると、入居者様がお互いの生き方を認め合い、ハイムでの生活の中心に、「共助・協同の輪」が少しずつ芽生えてきている様に感じております。

十名程度の小規模のホームですから、ここに住む皆様が顔を合わせれば自然と笑顔になり、優しく、仲良く過ごせ、安心感を抱き、心豊かな毎日が送れる…。入居者の皆様にとって、ハイムがそんな家庭的で暖かな雰囲気を感じられる場所となればと思います。今までの人生で背負ってきた荷物をここで一度下ろしリラックスして欲しい。御友人や御家族、お孫さんを招待したくなるホームになることが願いです。

## 知的障害者通所授産施設 望みの門新生舎 「スポーツの秋・食欲の秋・読書の秋」

作業指導員 小川 喜之

先ずはスポーツの秋。一〇月八日、第四二回地域交流スポーツ大会が行われました。当日は絵に描いたような運動会日和。澄み渡る青い空に白い雲が点々と浮かび、グラウンドを渡る風も今か今かと開会式を待ちわびているようです。朝八時から担当職員がテントを立ち上げコースを描き、中央から四方に万国旗がたなびきます。「よいしょよいしょ」ペッ

タンペッタン」と景気の餅つきがかずさの里の子ども達によって行われ会場を盛り上げます。いよいよ競技の開始です。方舟乳児園の乳幼児の「初めてのよいいドン」はちよこちよこ歩き始めた園



児の姿はなんととも微笑ましいものです。会場の二〇〇人を超える参加者もみんな「がんばれー」と声援を送っていました。プログラムも順調に進み、各施設別に玉入れや綱引き、ボール運びと競技にも熱が入り、来賓の方も全員が競技に参加していただき、あっと言う間に午前のプログラムが終了です。午後は景気の良い新生舎のよさこいソーラン節から始まり、会場のほとんどの方が参加したパン食い競争。乳児からお年寄りまで全員が一つの円になって音楽に合わせてボールを回し、音楽が止まる度に歓声が上がります。会場の全員が参加して一つの競技を行っている光景は、何か施設や年齢といった垣根を超えてひとつになつていようでした。今回、近隣の方を始め富津市社会福祉協議会など、多くの地域の方々の参加をいただき盛大なスポーツ大会となりました。反省会では玉入れのカゴの高さや次の競技の誘導、受付の人員配置等々、来年度への課題も確認されていますが、年を重ねる度に運営や進行もスムーズになり内容も充実してきてい

る様に感じます。来年はもう少し進化したスポーツ大会となるよう取り組みたいと思しますので、楽しみにして下さい。

続いては食欲の秋。新生舎でも秋は一番活気づく季節です。ご存じのように稲作事業を開始して今年で四年目となります。三月の大震災で田んぼには津波が押し寄せ、田んぼは一面ゴミの山。何よりも作付けしていた春キャベツは全滅し、ほとんどの田んぼは塩害を被ってしまいました。ゴミの片付けや除塩作業を繰り返しようやく迎えた収穫の秋。九月七日には井本常務理事を先頭に新生舎全員で稲刈りを行い、コンバインで刈り取った後の「終わったあ」という満足感は今までにならぬものがありました。期待した収穫量よりも遙かに多く、総収穫量は五・一トン。予測できないほどの豊作となりました。これだけ多いとできあがった米をライスセンターから運ぶのも一苦労。倉庫に積み上げる作業もこれまた一苦労。作業した利用者、職員は翌日全

員が筋肉痛となりました。早速、新生舎でおにぎりにしてみんなでお食べしましたが、苦労した分、何かひと味違っていったように思います。利用者も「二個目ーっ」「俺三個目ーっ」と次々に



頬張り、まさに食欲

の秋。いっぱい仕事をしていっぱい食べて、「自分も頑張っているぞ。」と胸を張っているようにどこか頼もしい姿に映ります。私もつついっばい食べて、「健康診断の結果が…。」とふと我に返ってしまったのは事実です。最後に読書の秋。：「これは来年頑張ることになります…。」

「体型共同生活介護事業 グレースホーム

「世話人」として

世話人 浅井 造

グレースホームは、自立支援法に基づく一体型生活介護事業所及び一体型生活援助事業所であり、第一グレースホームから第四グレースホームの四ヶ所の共同生活住居において、利用者の日常生活支援を目的として運営されています。

今回は、世話人の日常の業務について触れてみたいと思います。まず、利用者の起床の声かけから始まり、着替え、トイレ誘導、洗面等の支援を行った後、いよいよ朝食です。第三グレースホームの場合、朝食は楽生園の給食にお世話になっています。利用者の高齢化に伴い、楽生園までは転倒しないように気をつけながらの誘導となります。次に、日中活動の送り出しの準備に追われます。日中活動場所は、新生舎二名、ヨカデイサービス三名です。特にヨカデイサービス利用者については、転倒等の事故防止のため送っていくという業務は、欠かすことが出来ません。その後、各部屋のハウスキーピングが待っています。

午後は、日中活動から帰って来る利用者の受け入れ、入浴、洗濯、夕食準備（調理）、就寝準備と業務は続きます。このように行っていることは、一般家庭と同様に毎日の掃除や洗濯・食事の提供はもちろんのこと、日用品の買い出し、利用者との買い物・散髪等生活全般にわたっています。最近、グレースホームの利用者も高齢化し、以前より自分でできることが少なくなってきたため、声かけや見守りだけではなく、直接介護をしなければならぬことも多くなっており、奮闘する毎日です。

考えてみると、グループホームは日常的な生活支援の場所であるため、世話人は、家庭でのお母さんのような役割が大きいといえます。男性である自分は、料理が不得手であり、世話人を始めた頃は重圧すら感じていました。しかし、今は他の世話人に助けてもらいながらではあります。一方、自分の活躍できる場は、グレースホーム内の営繕係としての業務です。大掃除はもちろんのこと、屋根に積もった落ち葉の片付け、害虫駆除、家具の移動など男性の力が必要になった時が出番であり、充実感を味わうところです。

この業務に就いて分かったことは、普段の暮らしのなかで、日常的な生活を維持していくことの大変さです。今後も毎日の生活を大切に、利用者の「暮らし」を支える世話人の仕事に、誇りと感謝を持って頑張っていこうと思っています。

地域活動支援センター 望みの門ヨカデイサービスセンター

ENRHYTHM

介護員 倉本 幸一

二〇一一年も早いもので段々と寒い季節になり風邪ひきさも出る時期になりました。ヨカデイに来る利用者さんは「おはよう」の元気な声で来所します。まずは「うがい」と手洗いをして席に座り、朝のお茶を飲みながら健康チェック（バイタル・体温・毎週、月曜日に体重測定）を行っています。中には体重計に乗ると「太ったかな」と声を掛けてきます。体重が「変わらないよ」と言うときと良かつたと、笑みを見せます。逆に「増えた」と言うときと食事の時に少し減らしてと声が出ます。健康チェックが終わると入浴が始まり午前中の活動も始まります。テレビで歌番組を見たり、ぬり絵をしたり、外をながめたりしながら午前中が終わります。一時三〇分から目薬と嚙下体操をし、食事の準備をし、食べる前に讃美歌「日々の糧」歌い、ゆっくりといただきます。食事が終わると全員で食器を片づけ歯を磨きテレビを見てのんびりとし、中にはぬり絵を始める人もいます。

休憩が終わると一三時三〇分から体操を始めます。まだ時間でないのに「早く体操を始めよう」と言う利用者さんもいます。体操が終わると午後活動が始まります。利用者さんに何をしたいかを聞くと「輪投げ、カラオケ、ぬり絵、なにもしたくない」と言う声が出ます。特に希望が多いのは散歩に行きた



いと言う声です。外の気温にに応じて行く様にしていきます。行けない時は輪投げをしたり、ボウリングをしたり、ボール遊びをし、出来るだけ体を動かそうとしています。中にはぬり絵とカラオケをしたと言う利用者もいます。できるだけ皆さんが好きな活動をして行きたいと思っています。体を動かさないと転んだ時に大げな可能性があると思います。私達支援者が積極的に声を掛けて体を動かし、楽しい活動をして行きたいと思っています。でもこれからは段々寒くなり動きが悪くなるので利用者さんが移動する時は支援者が注意をして行きたいと思っています。週に一度、聖書のお話の時間も設けています。

午後の活動が終わると三時のおやつになります。「今日はこぶ茶がいいとか、私はコーヒーとか、しょうが湯が飲みたい」と言い、出来るだけ利用者さんの好きな飲み物を出しています。中にはお昼の食事とおやつを楽しみに来ている利用者さんがいます。おやつが終わると掃除をして最後に「今日の日はさようなら」を歌い帰ります。月一度、調理実習とおやつ作りもしています。

私たちはこれからも利用者さんの健康と一日過ごして楽しかったなと言う声が出る様な支援をして行きたいと思っています。



### 中核地域生活支援センター 君津ふくしネット 「中核地域生活支援センター現在と今後のあり方」

センター長 西山 信男

『理不尽な理由で辛く悲しい思いをしている人はいないか？』八年目を迎えた千葉県の単独事業である中核地域生活支援センターは、障害のある人もない人も誰でも、何でも二四時間・三六五日の対応で、相談支援を実施しています。また権利擁護・地域総合コーディネート事業を通じて地域支援を推進しています。

昨年度の相談件数は、七〇八〇件（五九〇件/月）になりました。これまでの実績から、行政や病院・学校・地域から期待される支援活動の本身は、益々多様化しており、通リ一遍の相談支援では解決しないケースが多くなっています。一人、或いは家族で多くの問題（介護・障害・虐待・引きこもり）を抱えて身動き出来ないケースは、根底に貧困があります。緊急を要するものから順番に糸口を探っていく、問題の解決を図ります

一方、昨年より事業委託費が一六%削減されました。中核センター事業のこれからについても、県と市町村の意見交換会が始まって、パーソナル・サポートサービス等の国の事業との統合も視野に入っています。いずれにせよ、『福祉の壁を越えた福祉』を展開する中核地域生活センターは、地域の相談センターとして必要不可欠なものになっています。ミッドナイトミッションのぞみ会・関係各

位の皆様には、改めて事業のご理解とご協力を頂きますよう、お願い申し上げます。

### 児童養護施設 望みの門がすずの里 「感謝祭を終えて」

児童指導員 小池 定直

かずさの里が産声をあげ、早五年が経つ中、改めて『感謝』という言葉をかみしめてみました。『感謝』はまさしく『感じて謝る』と書きます。自分の愚かさに気づき、或いは相手（地域の方々）に普段から手間や気遣いをさせてしまっていることなどに気づき、頭を下げることで自己反省の気持ちが無ければ、感謝の気持ちは起きてこないと思います。その上で地域の中で暮らしていること、沢山の方々のお力添えにより毎年盛大に感謝祭を迎えられることに心からありがとうと思えることが『感謝』だと改めて心に刻みました。子どもたちと共に、地域に生き、育つことへのふり返りとしてこの感謝祭を今後も受け止めて行こうと思います。

こうした中、感謝祭での子どもの様子も変わってきています。

開所当初から里で暮らし、地域の中へ溶け込んできている子どもたちの中でも、里（施設）での生活に対しての不安や羞恥心を、常に心の中に持ち合わせています。それ



